

4. Tl-201 心筋イメージング法による AC バイパス術後のグラフト開存に関する評価

矢野 仁雄 酒井 雅司 久保 博
野村 秀樹 斉藤 義昭 海老根東雄
矢吹 壮 町井 潔 (東邦大・三内)

AC bypass 術を施行した64例(狭心症29例, 心筋梗塞35例)を対象に, 負荷心筋イメージング法(Ex-Tl-IM)でグラフトの開存性を検討した. 術前の Ex-Tl-IM で reversible defect を呈した領域への 74 grafts では術後に心筋灌流量が増大した 67 grafts 中 64 grafts (96%) が開存し, 増大しなかった 7 grafts 中 6 grafts (86%) が閉塞し有意差 ($p < 0.001$) を認めた. 術前に fixed defect であった 20 grafts に関しては 3 grafts の領域のみ術後に心筋灌流量は増大し, 2 grafts (67%) の開存は確認されたが変化しない17 grafts の領域は評価できなかった. また術前 no defect であった 61 grafts に関しても, 術後 new defect が生じた 1 graft の領域は閉塞していたが, 変化しない 60 grafts は評価できなかった. Ex-Tl-IM は AC bypass 術の graft 開存を評価するにあたり, 術前に reversible defect を認める領域に対しきわめて有用であったが, fixed defect や no defect 領域の graft 開存を予測するには限界がみられた.

5. コンピューターに接続した γ -カメラによる下肢リンパ流に対する毛細血管内静水圧の影響

中村 良一 廣田 彰男 新井 功
境 敏秀 矢吹 壮 町井 潔
(東邦大・三内)

対象は健康人12例(男女比 7: 6, 26.2 ± 8.9 歳), 各種疾患患者 14 例(男女比 4: 10, 51.6 ± 13.1 歳)であった. 方法は臥位にて $^{99m}\text{Tc-HSA}$ 0.1 m/ 3 mCi を前脛骨部皮下に注入, 大腿部にて40分間記録し, 時間放射能曲線をリンパ流として得た. 末梢静脈圧 PVP を足背静脈にて測定し, 10分ごとに (1) 下肢下垂18例(健康人6, 患者12), (2) カフによる加圧9例(健康人6, 患者3)を行った.

結果: PVP 上昇によりリンパ流充進をきたした者は 59.3% (16/27) で, 健康人 41.7% (5/12), 患者 73.3% (11/15) であった. さらに充進例 16 例中 PVP < 30 mm H₂O でリンパ流充進したものは 0, $30 \leq \text{PVP} < 40$ で 3,

$40 \leq \text{PVP} \leq 50$ で 10, $50 \leq \text{PVP} < 60$ で 2, $60 \leq \text{PVP}$ で 1 例であった.

結語: 下肢では末梢静脈圧がほぼ 35~60 mm H₂O に達するとリンパ流が活発化する傾向にある.

6. I-123 IMP SPECT により crossed cerebellar diaschisis を疑われた症例

百瀬 敏光 小坂 昇 西川 潤一
町田喜久雄 土屋 一洋 町田 徹
大嶽 達 飯尾 正宏 (東大・放)

3 例の脳梗塞患者に対して I-123 IMP SPECT を施行し, crossed cerebellar diaschisis を呈した症例を経験したので報告する.

第1例は49歳男性, 右片麻痺があり, IMP で左前頭葉から頭頂葉, 病巣と対側の小脳半球で perfusion の低下をみた. 血管造影で左中大脳動脈起始部の閉塞がみられ, X-CT では左基底核の低吸収域を認めるのみであった. 第2例は78歳男性, 左片麻痺と左半側空間失調を認め, IMP で右前頭葉から頭頂葉, さらに対側小脳半球への perfusion の低下を認めた. X-CT では cerebral atrophy のみであった. 第3例は63歳男性で右上肢知覚障害と右片麻痺を呈し, IMP で左大脳半球の広範な領域および対側小脳半球に perfusion の低下を認めた. X-CT では左前頭葉深部から頭頂葉にかけて低吸収域を認めた. crossed cerebellar diaschisis は 1981年, Baron らが $^{15}\text{O}_2$ を用いた PET による報告を行ったが, I-123 IMP SPECT によって簡便に診断できると考えられた.

7. ^{123}I -IMP 所見と XCT 所見とに相違のみられた脳疾患症例

石井 勝己 山田 伸明 中沢 圭治
高松 俊道 菊一 哲夫 鈴木 順一
依田 一重 松林 隆 (北里大・放)
坂井 文彦 (同・内)

局所脳血流を反映していると言われている N-isopropyl-P [^{123}I]-Iodoamphetamine (IMP) による SPECT 所見と X 線 CT 所見との間に相違のみられた脳血管障害例について報告する.

[症例 1] 70歳, 女性, 2 年前に脳出血あるも軽快, 本